

公表 事業所における自己評価総括表

事業所名	児童デイサービス さんこま(児童発達支援)		
保護者評価実施期間	2026年2月3日		～ 2026年3月26日
保護者評価有効回答数	(対象者数)	6	(回答者数) 5
従業者評価実施期間	2026年2月19日		～ 2026年2月26日
従業者評価有効回答数	(対象者数)	5	(回答者数) 5
事業者向け自己評価表作成日	2026年3月26日		

分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや 意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	馬と多様な自然環境を介した基本的信頼感の獲得 山・川・生き物が共生する豊かな環境での馬事活動を通じ、未就学児が「安心」と「信頼」の土台を築く体験ができている。	馬への給餌や触れ合いを療育の核とし、子どもが自分のペースでリラックスできる居場所を確保。非言語的なやり取りを重視した環境を構成している。	自然環境の多様性を活かした感覚統合的アプローチを深化させる。言葉以外の反応(視線、呼吸、微細な動き等)を捉えるスタッフの観察眼をさらに養う。
2	イラストや動画を活用した「伝わる記録」と共有 イラスト付きのフィードバックや活動動画の共有により、保護者が子どもの成長や躍動感を具体的に把握できている。高い信頼を得ている。	連絡帳に視覚的な情報(イラスト・写真・音声)を盛り込み、多職種(保育・福祉・馬事)の視点を統合した「躍動感のある記録」を継続している。	記録の質を平準化しつつ、家庭での様子をより詳細に吸い上げる仕組みを強化。記録を介した「双方向の療育方針の共有」をさらに一歩進める。
3	家族全体を支える多世代・きょうだい児支援 きょうだい児の参加や家族交流イベントを通じ、家族全体のウェルビーイングを支える姿勢が評価されている。	季節ごとのワークショップや地域交流の場に家族全員を招き、保護者が「何でも相談できる」心理的安全性の高い関係性を構築している。	保護者から支持されている「相談のしやすさ」を基盤に、保護者同士の横の繋がり(ペアレント・サポート)や、レスパイト支援の拡充を検討する。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている 課題の要因等	改善に向けて必要な取組や 工夫が必要な点等
1	送迎距離に伴う、保護者との対面コミュニケーション時間の不足 街からの物理的な距離により送迎時間が長く、未就学児の保護者と直接対面して日々の成長や支援意図を深く共有する時間が制限されている。	街から離れた立地条件による送迎時間の長時間化、および送迎業務によるスタッフの拘束。	オンライン個別相談(Zoom等)を定例化し、顔を合わせた対話機会を確保する。対面不足を補うため、保護者から高く支持されている「イラスト付きの活動記録(音声・動画・写真含む)」の質をさらに高め、家庭での様子を双方向に吸い上げるデジタル連携を強化する。
2	安全管理(避難訓練・防虫対策等)の具体的プロセスの可視化不足 安全計画に基づき牧場内での訓練や点検を実施しているが、保護者から「実施状況や具体的内容が見えにくい」との指摘があり、安心の根拠提示に課題がある。	避難訓練や事故防止対策が牧場・裏山などの現場で完結しており、そのプロセスを保護者へ定期的に報告・共有する仕組みが未確立であること。	避難訓練や防犯訓練の様子を写真・動画で記録し、事業所通信やSNSで定期的に公開する。また、牧場特有のリスク(虫刺され等)に対する除草頻度や防虫基準を言語化した「安全の手引」を整備・周知し、安全管理の透明性を向上させる。
3	年度更新時期における人員配置の変更に対する保護者の不安感 春先の職員配置や担当者の変更に対し、保護者が支援の継続性や、スタッフ間の専門スキル(馬事・療育)の均質化に不安を感じやすい。	馬事活動と児童発達支援を両立させる高度な専門性が求められるため、支援の質が特定のスタッフの経験値に依存しやすい組織構造。	新旧スタッフによる徹底した二重配置での引き継ぎを行い、新体制を早期に公表する。支援技術(馬事・感覚統合・記録等)のマニュアル化・平準化を進め、担当者が代わっても「当事業所の支援の軸」が変わらないことを個別支援計画の更新説明を通じて丁寧に証明する。